

---

# 日番谷とやちるとオセロゲーム

切香

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

日番谷とやちるとオセロゲーム

### 【Nコード】

N4975D

### 【作者名】

切香

### 【あらすじ】

やちるが日番谷に14連勝している、あることとは？十一番隊中心、99%ギャグ、1%ほんのり。

## 前編 十一番隊の憂鬱な午後

ひつがや  
日番谷隊長は仕事においては、精霊廷一の鬼である。

「嵐が来たぞー！ー！！」

十一番隊隊舎の門が大きく開かれ、門を開けた二人の隊士が大声を張り上げる。

「な、なに・・・！」

「ついに今月も来たか！」

動揺する十一番隊士たち。しかし、逃げることは許されない。

果たして開かれた門の真ん中に立っているのは、彼らの隣の隊舎の主、十番隊隊長・日番谷冬獅郎である。  
ひつがやとうしろう

「日番谷隊長！今月も『美しく』お願いします♪」

ムダに瞬歩で現れたのは、第五席・綾瀬川弓親。  
あやせがわゆみちか

妙にくねくねしたムダの多い動作で、紙の束を差し出した。

その紙の束、とは。

言わずと知れた、十一番隊に割り振られた、業務の数々である。

曰く、担当地区に虚が現れた。曰く、正体不明の事件を調査せよ、等々。

一ヶ月間一指も触れられていなかったそれらは、すでに二寸を越える幅に達している。

日番谷はその分厚さにも臆することなく（諦めたともいうが）、鷹揚にうなずくと、ぱらぱらとその束をめくり、何枚か手馴れた動作で引き出す。

そして、それを弓親の手に付き返す。

「了解です！」

こんなにかよオ、などとグチを垂れることなく（きつとそれは美しくないと思っている）、弓親はあくまで優雅に受け取る。

残りの紙に目を落としながら、日番谷はズカズカと十一番隊舎に足を踏み入れる。

そして、通り過ぎざまに、

「お前はこれやっとけ」

「お前にはこれだ」

そう言つて、次々と業務を十一番隊士に振りまいていくのである。

恐らくこの隊長、更木<sup>ザラキ</sup>よりもよほど、十一番隊士の適性を的確に把握している。

目にした隊士にもっとも適性のある仕事を、速やかに見つけ出し、そして指示する。

その目がいかに慧眼<sup>くわいがん</sup>かは、草鹿<sup>くさしか</sup>やちる副隊長には、今の今までいかなる仕事も割り振ったことがないことから明らかだ。

文句を言おうにも、これはそもそも十一番隊の業務なのだから言いようがない。

さらに、彼らが上官は最奥の部屋で今もきつと昼寝中なのだ。尚更何も言いようがない。

暗黙の了解として、業務を言い渡されれば即やらなければならない。なぜなら、そのほとんどは既に期限がとつくに過ぎているからである。

そのため、受け取った隊士はそれを見るなり青くなり、次々にすっ飛んでゆく。

日番谷隊長のゆくところ、人っ子一人残らないといわれる由縁である。

さらに、十一番隊舎を通り抜ける10分ほどの間、一度も立ち止ま  
ったことがない、という伝説もある。

実際立ち止まるどころか、足を緩めるのを見た隊士さえいないら  
しい。

「これ更木にやらしとけ」

最後の十枚ほどを後ろにいた第三席、斑目まだらめいっかく一角にヒラリと落として、  
日番谷は十番隊舎に帰って行く。

「今月もお疲れさんでした！」

その後姿に、（生き）残ったものは全員、頭を下げて見送るのだっ  
た。

十一番隊に月に一度訪れる、嵐。

陰では「小」嵐、と呼ばれていることは日番谷本人だけが知らない  
（ちなみに、やちるが引き起こす様々な面倒は「極小」嵐とよばれ  
る）。

余談だが、この嵐は十三番隊舎にも、たまに訪れるらしい。

肝心な時に血を吐く癖のある隊長がおられるからだろう。

十三番隊舎の中では、この嵐のことを「小」隊長のお成り、と呼  
ぶらしい。

もちろんこのことも日番谷だけが知らない。

水と油ほど違う二隊だが、小さいものを小さいと思う発想は同じな  
のだった。

\* \* \* \* \*

そんな状況であるからして。

ある日、やちるが一角と弓親に向かって、

「ひつつんに氷もらつてきて、カキ氷作ろうよ！」

と言い出した時、一角と弓親は二人して手を横に振った。

ミーンミーン、ミーンミーン、しゅわしゅわ・・・

外では蝉の大合唱が響く、うだるような暑さの8月の昼下がりである。

もちろん、業務時間中、である。

「んな命知らずなこと止めた方がいいつスよ。」

仕事の日番谷隊長に、カキ氷作りたいから氷輪丸ひょうりんまるで氷を出してく

ださアイ」

なんて言おうものなら、氷漬けにされかねないス」

一角は日番谷の眉間に深く、それは深く刻まれたシワを思い浮かべる。

「更に恐ろしいことに、『来たならついでにこれやつとけ』とか言つて、仕事を振られるかもしれませんよ？」

仕事を一度も振られたことのない、やちるには分からないかもしれないが。

ひよい、と渡されたこの仕事で死に掛けたり、あの仕事で一週間徹夜したり。

日番谷の采配はかなりスパルタなのである。

「ぜんっぜん大丈夫だよ！あたし、ここ二週間毎日、氷出してもらつてるもん！」

な、なに？

一角と弓親の顔がひきつる。

あの日番谷隊長相手に、14連勝中？

「おいっしーよ！つるりんとゆーみんも行こうよ！」

さつさと先に立って歩いていくやちるの背中を見て、一角と弓親は顔を見合わせる。

そして、興味半分、カキ氷食いたさ半分に、よっこらしよと体を起こした。

## 中編 草鹿やちるの挑戦

「ひつつーん！遊びに来たよー！」

そして、開かれた戸の向こうの光景に、一角と弓親は絶句することになる。

「ひ、日番谷隊長・・・！」

そこにいたのは。

執務室の机にぴくりともせず伏せた、日番谷の後頭部だった。

倒れたとか、失神しているとか、そういったことではない。

ぐつつたり、という風情である。

仕事の鬼、来た仕事来た仕事斬っちゃ捨て斬っちゃ捨て、の勇姿と同一人物とは、とても信じがたい。

「ひつつーん・・・」

そろり、そろり、とやちるが日番谷の机まで歩み寄る。

正体不明の日番谷隊長を心配そうに見下ろし、やおら・・・

「てめえコラ！体の回りにチョークで線引くんじゃねえ！」

「きやははは、殺人事件ごっこー！！」

はしゃぐやちるのピンク色の頭を、一角がわしつと掴んで引き戻した。

「んー？やちる？？」

ぎゃあぎゃあと騒いでいる声に、むっくりと長椅子から人影が起き上がる。

寝すぎで腫れた目をこすり、ふわぁ、とアクビをしてみせる。

日番谷にこれほど近い位置にしながら微塵も働かない、その存在が護廷十三隊の謎の一つ、松本乱菊副隊長である。

「あら、なあにやちる、あんたまた氷？」

伸びをしながら立ち上がり、日番谷の突っ伏す机に歩み寄った。

机の上に放り出してあつた団扇を手にとると、ぱたぱたと日番谷を扇ぐ。

「ま・・・松本、コレは・・・」

一角が「コレ」すなわち日番谷の頭を指差す。

「隊長、ほんと夏弱いだよ。9月の頭までは、ずーっとこんな感じよ」

そうだったのか・・・！

確かに、年がら年中氷を出しているこの隊長の夏嫌いは、聞いたことがあるような気がする。しかし、これほどまでとは思わなかったのだ。

一番初めに一角と弓親が思つたのは、八月は、あの仕事の山から解放されるか、ということだった。

しかし、そうなれば九月の十一番隊は存在自体が危ない。

「ひ、日番谷隊長？」

恐る恐る、弓親が日番谷に呼びかける。

十一番隊のためにも、今ここで沈没されると困る。

日番谷は、返事だか呻きだか区別がつかない声を漏らして、自分を見下ろす四人の顔を緩慢な動作で見返した。

「てめえらにやる氷はねえ・・・」

まるで借金の取立てを食らつた中年男のような物言いを残し、ぱたり、とまたうつぶせに戻った。

「ほらね」

乱菊は日番谷を扇ぐ手を休めずに言う。

ホラネーじゃねえだろ！一角は突っ込む。

十番隊の心配なんてする余裕があるはずもないが、この調子じゃ無敵の十番艦隊すら危うい。

やちるがニコニコしながら日番谷の背後に回る。

ともかくにも、やちるがゆっくり人に忍び寄るときには、ロクなことが起こらない。

やちるは、そーっと両手を高く上げ・・・

「えーいつ、くすぐり攻撃！」

唐突に日番谷の脇腹に両手を差し込む。

「ひやはは、やめるコラ、草・・・」

普段の彼からは信じられない異音を発し、日番谷が後ろを振り返り・・・その拍子にガン、と肘を椅子の背もたれにぶつけた。

「・・・！」

無言で肘を押さえ、机に再び突っ伏す日番谷隊長。

——今絶対、キーンってなってる・・・

全員がそう思ったとき、罪の意識はまるでないやちるは、日番谷を指差して笑っている。

「やーい、ひつつん、バカー！」

十一番隊の隊士どもの中で、十番隊隊長様ともあろうお方を馬鹿呼ばわりできるのは、やちるくらいのものだろう。

「斑目・・・綾瀬川」

その激痛でちよっと我に返ったらしい日番谷が、若干涙目で、話がまだ通じやすそうな二人を見上げる。

「コイツを連れてどっか行け。バカが移る」

自分の今しがたの行動がバカッぱいという自覚はあるようだ。

「ひつつんが氷出してくれたらどっか行くー！」

両手で背もたれにしがみつき、やちるが日番谷を見下ろした。日番谷が心から面倒くさい、という顔で振り返る。

「いい加減にしろ。毎日毎日・・・いつまで出させる気だ」

「秋が来るまで！」

「つまみ出せ」

やちるを指差し、日番谷が一角と弓親を見やる。

「いいじゃないですか、隊長。氷出したら隊長も涼しいでしょうに」

「何だ松本、助け舟出すのか？」

「そんな舟出しませんでば。カキ氷あたしも食べたいし」

結局それか。日番谷がおそらくいいそうになった言葉を飲み込む。

「力使った後はますます暑くなるんだよ。大体業務中だぞ、今は！」

「寝てたじゃないですか」

「てめえだつて寝てただろ！」

まあまあ、と弓親が、レベルの低い二人のやり取りをとりなした。

「いいじゃん。まだ二週間くらいしか頼んでないし」

「二週間・・・てお前、二週間も連続で出してんじゃねえか！」

やちるを日番谷が振り返る。どうやら火に油だったようだ。

やちるが口を尖らして叫んだ。

「じゃあ、勝負しようよ、ひつつん！」

「しょうぶ・・・しょうぶって勝負か？」

とつさに漢字が分からなかったか、日番谷が返事しようがないコメントを発する。

ネジが緩んでいるせいもあるだろうが、やちると、勝負が言葉として結びつかないのだ。

うん、とやちるは自信満々にうなづく。

「オセロで勝負しようよ！あたしが勝ったら、ひつつんは毎日氷を出す。」

ひつつんが勝ったら、もう出さなくていいよ！」

あー・・・

一角と弓親は、一瞬にしてやちるの魂胆を見抜いた。

この副隊長は、基本頭を使うことが苦手・・・というよりも、どこかで太い神経一本切れてしまってるんじゃないかと思うくらい、頭を使うことが出来ない。

しかし、なぜか、本当になぜか、オセロだけは恐ろしく強いのだ。

一角などは、先日驚異の二百連敗を喫したばかりだ。

「おんもしろそうですね！」

それに乗ったのは松本だった。

日番谷が文句を言うよりも先に、どこかへバタバタと走って言ったが早いか、すぐにオセロの盤を持って戻ってくると、長椅子の前の机に置いた。

「はい！準備完了！！！」

こんな時ばかり手際がいい己の副隊長を、日番谷は恨みがましい目で見上げた。

しかし、ここで対局する労力と、これから秋まで毎日氷を出し続ける労力を天秤にかけたのだろう。

ややあってため息をつく、椅子から立ち上がった。

## 後編 日番谷冬獅郎の敗北

ツクツクホーシ、ツクツクホーシ、しゅわしゅわしゅわ・

昼下がりの十番隊執務室で、カキ氷を賭けて対局する日番谷とやちる。

それを息をつめて見守る、乱菊、一角、弓親の三人。

なんで、こんなことになってんだ・・・？

日番谷は、パシッと白を置きながら、暑さでぼんやりとする頭で考えた。

大体、と日番谷はえっちらおっちら考えを進める。

考えてみれば、氷を出したほうがよくぽど早いじゃねえか！

それに、オセロに勝てば毎日氷をもらえて、負けたところで損するわけじゃねえし、

こいつには何のデメリットもねえ。

ニコニコしながら黒を置くやちるの顔が、いつになく黒く見える。

この野郎・・・

日番谷はフツフツと闘志を燃やした。

そして、三十分後。

いなくなった三人を探しに来た更木は、遠慮も何もなく、がらっと十番隊執務室の引き戸を押し開けた。

「おい、邪魔するぜ・・・って、どうした？」

引き戸を開けて真っ先に目にしたのは、目当てのやちる、一角、そして弓親。

正確には、

あんぐり。

とばかりにあげられた三人の口だった。

「初めに言ったとおりだ、もう氷は出してやんねーぞ。気が済んだら帰れ」

日番谷が無造作に言い捨てて、長椅子の背もたれに体を投げ出した。テーブルに置かれたオセロ台は、三分の二くらいを白が占めている。日番谷冬獅郎の圧勝、だった。

天才少年、おつむの弱い少女にオセロで勝つ。

確かにそれは当たり前、といえば当たり前前の結末なのだが。

十一番隊内では無敵の強さを誇るやちるが敗北を喫するなどは、負けまくっている一角にも衝撃を与えた。

——ん？十一番隊内……？

それがそもそも比較対象としてマズかったのかもしれない。

「さ。行きましょう、副隊長。勝負は勝負ですよ」

弓親がさらりと言って立ち上がり、やちるの頭を見下ろした。

「ん……」

やちるが声を発する。

暴発するか？暴発なのか？

爆発物を見るような目で、更木をのぞく全員が、それとなく身構える。

しかし。

やちるは、そのまま無言で立ち上がった。

呆然として見守る一同を尻目に、やちるはオセロ台に背中を見せると、トボトボと肩を落とし、更木のほうへ歩み寄った。少なからず、シヨックだったらしい。

そのことに気づいて、その場を微妙な空気が流れた。

——あーあー、本気でやつつけちゃってまア・・・  
という非難の目を、日番谷は一身に受ける。

日番谷は知るか、という表情でソッポを向いている。  
考えてみれば、日番谷には何の落ち度もないのだ。

しゅん、とやちるが鼻を鳴らす音が聞こえた。

そして、ぴょん、と更木の背中に飛び乗り、その肩に顔を埋める。  
更木が、一角と弓親をざつと見ると、廊下に向き直った。

「オイお前らも、帰——」

だん！！！

突如響いた音に、その場の全員がぎよつとして振り返る。

日番谷が、踏み抜かんばかりの勢いで床を踏み鳴らし、立ち上がったのだ。

憤懣やるかたなし、という表情の日番谷が、大股で自席に向かうのをぼかんとして見守る。

「氷を出せばいいんだろう、氷を——」

「ひつつん大好き——」

日番谷が氷輪丸を引っつかむのを見て、やちるがパーッと顔を輝かせた。

それを見て、プーッと乱菊が噴き出す。

「それじゃ、意味ないじゃないスカ・・・」

「だまれ！」

最悪のタイミングでもっともな突っ込みを入れた一角は、放たれた氷輪丸の一撃で氷付けにされた。

\* \* \* \* \*

「やっぱりカキ氷はブルーハワイよねー」

「あたしメロンがいい！」

「氷そのままのほうがうめーよ」

やいのやいのと賑やかな十番隊執務室。最早、執務室の体をなしていないが。

日番谷は自席の机に、初めと同じように突っ伏している。

——今夜は徹夜だ・・・

山積の仕事を思い浮かべ、そう思ったとき。

ぴとり、と頬につめたいものが押し付けられた。

顔を上げると、そこには満面の笑みを浮かべる、やちるの姿。

「最後のメロン、ひつつんにあげる！」

「・・・」

「なーに？」

何か言いたげな仏頂面を向けた日番谷に、やちるはきょとん、と首を傾げる。

はあ、とため息をつき、日番谷は無言で差し出されたカキ氷を受け取った。

日番谷冬獅郎、今日も草鹿やちるに敗北を喫す。

執務室の窓の向こうでは、ここぞとばかりにセミが鳴いている。秋までは、まだ長そうだ。

## 後編 日番谷冬獅郎の敗北（後書き）

やちるのオセロの勝負強さ、カキ氷ネタ、日番谷の夏嫌いはオフィシャル設定から取りました。これくらいのこととは実際起こってそう・

お粗末さまでした。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4975d/>

---

日番谷とやちるとオセロゲーム

2010年10月9日17時20分発行